

## フレンツ神父 札幌での黙想会 2019年7月5日～7月7日 花川修道院にて

### 講話1：

私が10歳くらいの時に母が本を買ってくれました。その本で、私は日本という国があり、北海道という島があることを知りました。

10歳のころに知った島に、私は今夜いるのです。ここにいられることを大変光栄に思います。今日、ここにいることは本当に神の導きです。神がここに私を招いてくださったと確信しています。

24年前の7月4日、私は司祭に叙階されました。そのときの私の望みは、様々な場所を訪れて説教をして歩くことでした。でも、この度はみなさんのところに歩いて来たのではありませんよ。飛んで来ました。

短期間にこれほど何度も飛行機に乗ったことは、初めての経験です。イエズスとともに機上の人になることほど素晴らしいことはありません。

神は人間を神と一致しているように創られました。

人が人を傷つけたり、落胆させたりすることは、非常にひどいことです。それによって信頼関係を失ってしまいます。

神と人間との関係も同じです。私たちはこのようにして神から離れてしまいます。最初の人類からそうでした。エデンの園でアダムとエバがした行為は、日常生活の中で毎日繰り返されているのです。

アダムとエバは神としっかりと結ばれていました。私たちも神としっかりと結ばれているように創られています。

神は、何が良く、何が悪いかを私に決めさせなさいとおっしゃいました。そこに蛇が来て、「神は本当に園のどの木からも食べてはいけないと言われたのか？」と聞きました。

結果、人間は神がとって食べてはいけないと言われた木から実を取って食べてしまったのです。

蛇は、この実を食べると神の知識を得る、利口になると言いました。

ヘブライ語で利口は『アロム』と言いますが、この木の実を食べた人間は『アロム』にはならず、『アルム（はだか）』になってしまったのです。

裸、つまり、何の保護もない状態です。神のご保護がなくなってしまったのです。

神はアダムを呼ばれました。「アダム、どこにいる？」

彼らは隠れてしまいました。なぜ隠れたのでしょうか？ 彼らが裸だったからです。これは、洋服をまわっていない状態だけを言うのではなく、神のご保護の状態でなくなったことを意味します。悪魔が神のご保護を取り上げたわけではありません。人間が自らしたことです。何か悪いことを行うとき、その行為に対して私たちには責任があるのです。責任を他の人に押し付けることはできません。

アダムは神に何と言いましたか？ 「あなたが私と共にいるようにしてくださった女がくれたのです。」ですね。そしてエバは「蛇がだましたので食べました」と言いました。

このように責任転嫁を試みた結果、アダムとエバは、以前のような神との一致、親密な状態、聖なる状態を失ってしまったのです。神と彼らの間に妨げができました。

アダムとエバはサタンの嘘を信じてしまいました。こんにちもサタンは私たちに美しく装った嘘を提供します。

アダムとエバは恥を覚えて身を隠しました。面白いことに、小さな子供達が何か悪さをすると、それが悪いことであることを自覚して隠れてしまい、「それをやったのはぼくじゃない、わたしじゃない」と言うのです。

罪を犯すと私たちは恐れを覚え、恥ずかしいと思います。それは子供に限ったことではなく、私たち大人も、みながそうです。

この恐れと恥をどうすればいいのでしょうか？ 蛇は、恐れや恥から逃れるための様々な解決策を私たちに提供します。そうすることで、今よりもっと神から私たちを遠ざけようとするのです。

ルクセンブルグ、ドイツ、スイスなどの裕福な国に住む人々は、たくさんの収入があります。

人々は、うつ症状が高じると麻薬を使用し、アルコールを飲みます。多くの人が、魂を麻痺させようと試みますが、そういうことをすればするほど、重みは増していきます。自分の人生を受け入れることができずに、うつ病になってしまうのです。

ルクセンブルグでは自殺をする人が多くいます。日本でも自殺者が多いと聞きました。私たちは決して人を裁いたり非難すべきではありません。しかし、そういう人たちを助けるべきです。そういう人たちに、「彼らに必要なものは何か」が彼らに分かるように、手助けする必要があるのです。

私のところに告解や面談に来る人たちに、私は「あなたたちには何が必要ですか」と尋ねますが、ほとんどの人が「わからない」と答えます。しかし、私は彼らの中にある大きな悲しみを感ずります。愛が足りない状態を感じるのです。人々は愛を探し求め、信頼できるものを探します。

私は彼らの話を、30分、一時間、あるいは二時間聴きます。彼らは自分が話終わって時計を見、長い時間話したことに気づいて驚き、言います。「すみません、あなたの貴重な時間を奪ってしまったみたいです」。

私は、「いいえ、これは私の時間ではなく、神がくださった時間ですから、大丈夫ですよ」と答えます。

大抵の人は「あなたのようにきちんと話を聞いてくださった方はこれまでにいませんでした」と言います。

話を聞いたからと言って、私は神ではありませんから、すぐに解決策を提供することはできません。司祭に課せられている役目は、人と神とを繋ぐことです。そして、神がその人のためにお与えになった場所にその人を連れて行くことです。その人が神の現存を感じる場所に連れていくことです。司祭がすべてを理解しているかどうかは問題ではありません。人と神が直接関わるようになるのを助けるのが役目なのです。

聖書の中に書かれている『罪』がどういうものかについて説明したいと思います。

第一に、「弓矢を放つ」ということについてお話ししたいと思います。

あなたが、50メートル先の的めがけて弓を射るとします。的の真ん中に命中させようとして狙いますが、弓を放つときにたった5ミリずれるだけで的を大きくはずしてしまいます。

私たちが目標からそれること、それが『罪』なのです。

私たちの目標は何でしょう？ 『神』ではありませんか？

聖書には、「私を見失う者は自分自身を損なう」（箴言 8：36）と書かれています。この「見失う」というのが「目標をそらす」ことです。

第二は「反抗、反乱」についてお話します。「誰かに対してぶつかって行く、従順ではなくなる」という意味です。神に対して反抗するどころか、神を忘れてしまうこともあります。砂漠でイスラエルはこれを繰り返し行いました。イスラエルの民は度々神を忘れてしまい、その都度神は彼らが思い出すようにさせました。

彼らは神を忘れ、動物を神として崇めました。人間は、常に礼拝する対象を求めるものです。

詩篇 19 章 14 節には興味深いことが書かれています。

「あなたの僕を引き留めて**高ぶるもの**らへ走らないようにしてください。彼らが私を支配しないようにしてください。そうすれば私は汚れることなく、大きな咎を免れることができます」。この「高ぶるもの」とは悪魔を指しています。悪魔は速やかに私たちを支配します。その中でも最も強い悪魔は、「高慢、傲慢」です。

みなさんご存知のように悪魔ルシファーはもともとは天使でした。それも光の天使、音楽を司る天使の頭でした。彼は神のようになりたいと思いました。その思い上がりにより、地に落とされたルシファーは、人間を自分と同じ目にあわせようと試みるのです。

ルシファーと共に神に反抗したすべての天使は、天国を出て行かなければなりません。それから落ちた天使たちは、人間を勝ち得るために絶えず働いているのです。

こんにちの教会の中では、「悪魔はいない」と言います。みなさんはどうお考えでしょうか。私は、現在は多くの人々が悪魔に、悪の力に強く縛られていると思います。

イエスご自身が悪魔について話されています。イエスは大勢の人を悪魔から解放されました。ヨハネ 10 章 10 節でイエスは、「盗人が来るのは、盗み、殺し、滅ぼすためにほかならない」と言われています。良い羊飼いのイエスは「私が来たのは、羊に命を得させ、しかも豊かに得させるためである」と言われます。

盗人である悪魔がおり、良い羊飼いである神がおられます。

神は、私たちが神のおそばに居ることをお望みです。放蕩息子の父は兄に対して、「あなたはいつとも私と共に居るではないか。私のものはすべてあなたのものだ」と言いました。

弟は父親に反抗して家を出、豚の餌を食べるような状態になるまで父を忘れていました。彼は空腹を覚えたとき、父を思い出しました。父を愛していたから思い出したのではなく、お腹が空いたから思い出したのです。「父のところの雇い人の方が私よりましな生活をしている」と思い、父の家に戻りました。

彼は父親に美しく整えた『謝罪』をしました。「お父さん、私は天に対しても地に対しても、あなたに対しても罪を犯しました。もう、あなたの子と呼ばれる資格はありません。どうか、あなたの雇い人の一人にしてください」。神学的に見て正しい謝り方でした。

私は、彼が言っている謝罪の内容よりも、空腹の方がはるかに大きかったのではにかと思うんです。この時、彼は、まだ父親の心がわかっていなかったのではないのでしょうか。

父が弟のために祝宴を催したのを知った兄は怒りました。父親が弟に新しい履物、着るものを用意し、手には指輪をはめたのです。「弟は息子である資格などないではないか！」と兄は思いました。

考えてみましょう。私たちも他の人のことをこのように批判することはないでしょうか？  
「あの人がこの地位を得るなどおかしい！」 「あの人にそんな資格などないはずだ！」

弟は反抗して家を出ました。兄は家に残りましたが、家の中で父に反抗しました。自分の弟を「弟」とも言わず、「あなたあの息子のために肥えた子牛を屠らせた。私には友人と祝宴を開くための子ヤギー一匹もくれなかった」と父親を非難したのです。つまり、兄の心も父親のそばにいなかったということがわかります。

ごミサのとき、毎回「心を上げましょう」と司祭が言い、「私たちの心は主のお側にあります」と答えています。（日本語では「心を込めて神を仰ぎ」「賛美と感謝をささげましょう」）  
私たちの心は、神のお側にあるのでしょうか？

父親は兄に向かって「私の子よ、お前はいつも私と共にいる。私のものはすべてお前のものだ」と言いました。

父親は同じことを帰ってきた弟にも言ったと思います。「私の子よ。私のものは、すべてお前のものだ」。

神は、そのように考えられる方です。「あなたの方が誰それより良い」とか、「あなたは誰それより劣っている」とか考える方ではないのです。私たちのいるべき場所は、神のすぐお側です。神は、神が私たちにお与えになったその場所を見つけることを望んでおられます。

イエスは、「私の人生を人類を救うための身代金として人類に与える」と言われています。

誘拐事件が起こり、身代金が請求されたとします。誘拐犯はたいてい武器を持っていますから、捕まった人はひどい目にあわされ、その家族も辛い思いをします。

イエスは、「人間は非常に凶悪な殺人犯、悪魔に捕まっている」おっしゃいます。このことが身体ではなく、魂に起こるのです。これ以上悲惨なことはありません。

しかし、これはどうやって起こるのでしょうか？ どうやって悪魔は私たちを捕らえることができるのでしょうか？

私たちが承諾するなら、悪魔はそれをすることができます。私たちが神に背を向け、神の嫌われることを行なうなら、私たちは自ら悪魔の領域に入っていくのです。

悪魔は神に向かってこう言います。「ごらんください。彼らは洗礼を受けた者ですよ！」

光を装った悪魔は最初「あなたを愛している」と言いますが、愛を示す行為など何もしません。

悪魔に捕まってしまった人間は、自分自身の力で悪魔の手から抜け出すことはできません。悪魔には、悪魔に許可を与えた人間を自由に扱う権利があるのです。

そこでイエスは言われます。「私は仕えられるためではなく、私の命を人間を救うための身代金として与えるために来た」。イエスは金銭ではなく、ご自身の御血で身代金を支払われました。イエスの御血が私たちを解放してくださるのです。

私たちを悪魔から切り離してくださるだけではなく、私たちの魂、感覚、身体を清めてくださいます。イエスの御血が唯一の治療薬なのです。この治療薬を神は教会に委託されました。これが教会の資産です。

ペトロとヨハネが神殿に登ったとき、『美しい門』のそばにいた足の不自由な人にこう言いました。

「私たちには銀も金もない。しかし、私たちの持っているものをあげよう。ナザレのイエスの御名によって歩きなさい」。

みなさん、この後の話はよくご存知ですね？ これ以上説明する必要はないでしょう。

みなさんは、神に愛され、特別に選ばれた特別に聖なる人たちです。

「神に愛されている」ことは何とか理解できても、自分が「特別に選ばれた聖なる人」であるということを感じるのなかなか困難ではありませんか？

マリア様、聖ヨゼフは確かに特別な聖なる方です。洗者ヨハネ、フランシスコ ザビエル、マキシミアン コルベも偉大な聖人です。

しかし、私たちが聖なる人？ うーん…。それも特別に選ばれたですって？

このことを信じることは、なかなか難しいですね。なぜでしょう？

私たちの身体は、元気な時もあれば病気のときもあるように、魂も同じです。もし、私たちが真理を生きていないと、魂は暗くなり沈んでしまいます。私たちの魂は、何かが間違っているということに気づきます。私たちがいつも意気消沈しているように仕向ける霊もあります。

私たちが痛悔し罪の赦しを願えば、神は赦してくださいます。私たちが悲しみに沈んでいるときも、神のところへ行く力をくださいますが、悪魔は常に私たちを告発します。

もっとも大きな誘惑は、チョコレートではなく気力をなくすこと、落胆することです。

「お前は聖人ではないだろう」「お前は、あんなこと、こんなことをやったじゃないか」とサタンは私たちを騙します。

ヘブライ語の「サタン」を直訳すると「告発する者」です。サタンは私たちの過ちを思い出させます。これまでの人生で犯した罪や弱さを思い出させ、気力を失わせ、悲しみの中に沈ませるのです。

時々私たちは、「私って本当は何者なんだろう？」と思うことはないでしょうか？

神様から本当に愛されているんだろうか？ 私は自由なんだろうか？

私がミオ・バラダのセミナーに参加したとき、ミオが告解の仕方を説明するのを聞いたのですが、彼は、罪を具体的に告白する告解の必要性を説いていました。

例えば、車の事故を起こしたとします。一言で『事故』と言っても、かすっただけ、あるいはどこかが凹んだだけ、という事故もあれば、けが人や死人がでる事故もあります。

車で人を轢き殺してしまった場合、司祭のところに行き、「車の事故を起こしました」と告解するだけでは足りないのはお分かりでしょう。実際に何をしたのかを具体的に告解する必要があります。

私たちは罪の名前を言う必要があります。つまり、犯してしまった罪を具体的に言わなければならないのです。

「第一戒は犯しませんでした。第二戒も犯しませんでした。第三戒は、やりました。第四戒律は、、、」とか、「私のすべての罪を赦してください」という風ではなく、具体的に何をしたかということと言うべきなのです。

みなさん、考えてみてください。あなたが怪我をして病院に行ったとします。医者は、「どうされましたか？」と質問してきますね。あなたは「ちょっと調子悪くて」と答えます。医者「どうして調子が悪いのですか？」と聞くでしょう。「頭痛がしますか？ おなかが痛いのですか？ 呼吸が困難ですか？」などと、いったいどこに問題があるかを探ろうとします。

医者「私たちが『傷』や『悪いところ』を見せるなら、治療することができるのです。」

告解も同様です。私たちが神に具体的な罪を打ち明けるなら、神は赦し、癒すことがおできになります。

イエスがエリコにいたとき、目の見えないバルティマイという物乞いは、「ダビデの子イエスよ、哀れんでください」と叫びました。イエスは足を止めて彼を連れてくるように命じました。イエスは彼に「何をして欲しいのか」と尋ねられました。

イエスには、彼が目が見えないことがわからなかったと思いますか？ そんなはずはないでしょう。それなのにイエスは「何をしてほしいのか」と問われたのです。

神学的に見て、このときのバルティマイの「ダビデの子よ、私を哀れんでください」という言い方は正しいものでした。

しかし、イエスは、バルティマイに何が必要なのかを、彼自らが言うことを望まれました。彼は言いました。「目が見えるようになりたいのです」。

私のところに来る人に、私は「あなたには何が必要ですか？」と聞きます。

告解に来た人は、イエスの代理である司祭に対して、はっきりと何が必要なのかを言わなければなりません。私たちの魂にはそれがわかっているはずですが。

魂は、自分にとって必要なもの、あるいは欠けているもの、痛みなどを感じているはずなのです。しかし、時々、自分自身で何が問題なのかがわからないときがあります。

みなさんが、告解や面談に行く時は、司祭がより良い助けを提供できるように、神の知識をいただけるように司祭のために祈ってください。また、自分を苦しめている『罪』を包み隠さずに告白できる恵みを求めて祈ることも忘れないでください。

神は、私たちが完全に自由になること、解放されることを望まれています。

「はい、終わった。次の方！」というような扱いを神はなさいません。神はあなたを丁寧に治療して下さいます。しかし、私たちの方に問題があり、神により頼みに行きません。敵が「お前は良くない者だ」「どうせできやしない」などと囁く声に耳を傾けるからです。

私が小さい時、一つ上の兄は、私に向かっていつも「お前は成績が悪いから、進級できない」と言っていました。私は、この兄の言葉を長い間信じていました。それなのに、進級できました。進級はできましたが、学友たちのようにスムーズにはありませんでした。もし、兄が「お前は大丈夫」と言ってくれていたなら、もっと簡単だったに違いないと思うのです。もっと意欲をもって学習できたと思うのです。

私たちは往々にして何かに束縛されてしまいます。聖パウロは、「私たちの戦いは血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」と言っています。

ということは、私にとって問題だと思っている親、兄弟、教師、上司が敵ではないのです。悪魔はそういう人を後ろで操ることがあります。私の実際の敵は悪魔なのです。

神は、この悪の力を私から切り離そうと思われています。私たちは自分自身の罪ゆえに妨げをつくる場合があります、また、先祖が原因の場合もあります。

私は7人兄弟の6番目です。私の兄弟の中には、大変自信に溢れ、積極的な者もいますが、私は臆病で引っ込み思案でした。ですから、私は神に心を開くことが容易だったのかも知れません。確信を持って言えることは、私も兄弟も私も、「神に愛されている神の子であり、神に特別に選ばれた聖人である」ということです。

そして、みなさんは、神に愛されている神の子供であり、神に特別に選ばれた聖人なのです。このことを、この週末にみなさんの心の中に深く刻みたいと神は思われています。

イエスは聖書の中で、たった一つの真珠を買うために全財産を投じる商人の話がされています。彼は見つけた素晴らしい真珠を手に入れるために、自分が持っていた他のすべてのものを売ったのです。彼は真珠を売り買いして家族を養っていたのですが、あるとき見たこともないほど美しい真珠を発見しました。それは高くすべての財産を売らなければなりません。彼は、たった一つの真珠を手に入れるために、それをしました。さて、彼はどうやって生きていくのでしょうか。家族をどうやって養うのでしょうか。

彼はそのたったひとつの真珠を誇りに思い、家族や友人たちに見せました。この真珠が彼の喜びとなりました。さて、この商人とは誰でしょう？

これは神ご自身です。神は、もっとも美しい真珠を求めて探しておられます。もし、その真珠を見つけたなら、今もっている美しい真珠を手放す用意があります。

神が見つけたもっとも美しい真珠であるあなたを、ご自分の財産である真珠、イエスを売って買われたのです。神はあなたの所有者でありたいと思われています。

預言者エレミヤは、「永遠の愛をもってあなたを愛した」（エレミヤ31：3）と書いています。神はあなたを見つけるまで、探し求められたのです。

あなたは、「なぜ神はそんなにまでして私を探されるのか、私にそのような価値があるのか」と言うかも知れません。あなたは自分の価値を知らないかも知れませんが、神は本当の値打ちをご存知なのです。

もしかすると、あなたは「いえ、私は高慢になってはいけない」「私は謙遜であるべきなのです」「私は人々から隠れていたいのです」「私は良い人間ではありません」などと言うかも知れません。

もし、本当に謙遜でありたいなら、神の目から見て自分はどのような者であることを学ぶてください。そうするなら、あなたは神の目に価値あるものであることがわかるでしょう。御父は、愛するひとり子イエスの尊い御血で、イエスの命で、あなたを買い戻されたのです。神はあなたを狂おしく愛しておいでなのです。

アルスの司祭 聖ヴィアンネは、「神は罪人の後を追って歩かれる」と言っています。それは、罪人を裁き、罰を与えるためではなく、救うために他なりません。

私たちは神の所有財産です。神に似せて創られたものです。私たちは私たちの中にイエスを抱いているので、御父は私たちの中に御子をご覧になります。御父は私たちをますますイエスに似たものにしたいと思われるのです。ところが、当事者の私たちは自分たちの受けた傷に苦しみ、それを信じるのが難しいのです。しかし、その苦しみのゆえ、神はもっと私たちを愛してください。

たとえ母親があなたを忘れても、私は決してあなたを忘れない（イザヤ49：15参照）と神は言われます。母親が自分の子供を忘れるというのは、非常に難しいことなのです。

妊娠中絶をした女性は、その子供のことをいつきも忘れることがありません。母と子の体がひとつだっただけでなく、魂も結ばれていたからです。

中絶をした女性の中には、子供が泣いている夢を見る人もいます。この子供たちは母親を訴えたいと思っているのではなく、母親が神と和解して欲しい、そして自分もお母さんを赦したいと思っているのです。

ですから、中絶について、きちんと具体的に告解することが大切なのです。また、その後その子供のためにミサ聖祭を依頼することも忘れてはなりません。神は、この子どものために『いけにえ』を捧げてくださいます。ごミサの中でその子は洗礼の恵みを受け、神に捧げられます。聖母と聖ヨゼフが代母、代父となってくださいと願ってください。

これから話すことは、私のところに告解に来た婦人から、人に話していいと許可をいただいたものです。彼女のは一人の息子がいました。ある告解のとき、そういえばもう一人子供がいたということ思い出しました。それまで聖書を読んだり、たくさん祈っていたのですが、自分の罪を意識したことはありませんでした。その時、彼女ははじめて自分が20年前に墮胎をしてしまったことを痛悔できたのです。私は赦しの秘跡を与え、ミサ聖祭を捧げました。彼女は、泣き続けていました。

私が彼女に「あなたには何人の子供がいますか？」と問うと、「息子がひとりです」と彼女は答えるので、もう一度聞きました。「あなたには何人の子供がいますか？」

今度はこう答えました。「はっ！ 二人です。一人は天国にいるんです」。そう言った瞬間、彼女は喜びで満たされました。

神は彼女に素晴らしい恵みをお与えになりました。彼女は、祈りの中でその子を見ることができたのです。「神父さま、子供は娘です」と言って名前を授けました。

彼女はその子がいつも聖母のそばにいて、聖母を助けているのを見たのです。

それを聞いて私はとても感銘を受けました。このようなことを、自分では作り出せないと思ったからです。これは恵みです。

神は決して人を裁かれません。もし、中絶をしてしまった人がいたなら、私たちはその人に真実を告げる必要があります。今の悲しみの状態から、うつ状態から解放されるのを手助けしてあげなければなりません。その人が子供と和解できるように、その子を受け入れることができるように。

流産したり、墮胎された子達は死んでいません。非常に生き生きと神のみ前にいます。

私たちは、大きなショックを体験した後で、自分の値に気づくことがあります。例えば、大罪を犯してしまった後で、「いったい何をしてしまったのか!」「こんなこと、どうして起こってしまったんだろう!」「もう、元のように戻れない」とショックを受けます。

多くの人はこういう状態になって、はじめて自分が神に属した者であることに気づくのです。そして、自分がどれほど神から離れてしまったかを見るのです。

そういう時、私たちはどうするでしょう?

そうです、恥ずかしさのあまり隠れるのです。

しかし、罪悪感に苛まれて隠れてしまうことよりも、心から痛悔することが大事です。

告解をする前に心から罪を悔いなければならない、と習いましたね。

私はこれまでたくさん告解をしました。司祭になってからも、たくさん告解をしました。しかし、正直に言いますが、『痛悔する』『心から悔いる』とはいったいどういうことなのか、わからないでいました。

三年ほど前のこと、神は私に『痛悔の恵み』をくださいました。『痛悔』は恵みなのです。私は長い年月、泣くことができませんでした。30年以上泣くということはしたことがありませんでした。しかし、主は涙の恵みをくださったのです。私は自分の魂の痛みを感じることができたのです。

神は独特な方法でこの恵みをくださいました。私は癌だと告知されたのです。私は癌に対してまったく恐れはありませんでした。今でもありません。しかし、それとは違う痛みが私の中にありました。私の中に聖霊をみつけられなかったのです。「聖霊を受けていない、まだ聖霊を受けていない」と私は何ヶ月も言い続けました。

末の妹は看護婦をしています。私が手術の前に組織検査を受けた時、妹も立ち合いました。妹が言うには、私は麻酔で眠りながら、「私には聖霊が必要だ」と言っていたのだそうです。もしかすると、立ち会っていた医者や看護婦は笑ったかもしれませんね。

聖霊を受けていないということが、私の心の奥にあった苦しみでした。が、手術を受けたあとは、もう、聖霊がないとは言いませんでした。「私は魂を失った」と言ったのです。いったい私の魂がどこにあるのか、わからなくなったのです。

このことは、私にとって、癌よりももっとひどいことでした。私に限ったことではなく、魂を失うということは、癌以上に人間にとって大変なことだと確信しています。

父と姉の一人は癌で死にました。そのことはとても心を締め付ける苦しみではありますが、魂を失うことの方がもっとひどい苦しみです。

そのような時、神は私にひとりの人物を送ってくださいました。その人は正直な人で、いつも真実を言ってくれました。私のために、私と一緒に祈ってくれました。司祭ではなく、普通の信者です。それまでも、分かちあったり共に祈った人はいましたが、神が送ってくださったその人は何か特別でした。

私は56年間、友人がいませんでした。「世の中にはもっとひどいことがあるじゃないか。友人がいなくても生きていけるさ」と思っていました。

神が送ってくれた人は、癒しの黙想会に参加するようにと、何度も何度も勧め、勇気づけてくれました。やっと私はドイツで司牧しているインド人の司祭、アントニー神父のところに行きました。その神父は、一年中、月に一度、月曜日から金曜日までの5日間、黙想会を指導しています。アントニー神父の黙想会に参加した私は、泣き、泣き、泣き、泣き続けました。

次に連れて行かれたのは、ミオ・バラダの信仰刷新セミナーでした。ミオの話すことは、私の心に深く触れ続けました。すると、45分間ほどミオの講話を聴いたところで、ミオは私に言いました。「告解を聴いてください」。私はもっと講話を聴いていたかったのですが、ミオの言葉に従いました。

その時の『告解を聴くこと』は、私にとって『爆発』でした。今まで体験したことのない仕方では私は告解を聴くことができたのです。司祭になってから20年以上、たくさんの告解を聴いてきましたが、この度は、これまでにないほどの勇気、力、知恵を、人を助けるために神が私にお与えくださったのです。それまで、告解をしに来た人に質問することをためらっていたような内容について、尋ねる勇気もくださいました。

いったいそれは何だったか、気になりますね？

これについては、次の講話でお話しします。

